

¡Hola amigos!

R と N の Málaga からの手紙

(012号)

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

2003年 8月22日 R & N

目次	更新日
身辺雑記	2003年 8月22日
食べある記	2003年 8月22日
買い物百般	2003年 8月22日
エクスカーション	2003年 8月22日
ビーノ y セルベサ	2003年 8月22日

ご注意 : 各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。

悪しからず。

* 身辺雑記 *

「窓辺の鳩・その後」ノ巻 2003年8月22日 更新

先週の金曜は、日暮れ前のいつもなら涼しくなりかける頃から、とてつもなく熱い、文字通りの熱風が吹き出しました。その直前カミナリが鳴り出したので夕立でもくるのかなと思っていましたが、雨どころか熱風の襲来です。雷と北の突風と来れば寒冷前線の通過かと思うのですが、普通、涼しくなるはずの北風が逆に熱くなってしまったのです。日中のカンカン照りで、フライパンのように熱くなった内陸部の地表を吹き渡ってくる間に、本来は冷たい筈の北風も熱風に変わったのだと思います。だから雨も降らず、普通の寒冷前線のようなではなかったんでしょうね。その夜は今までになく暑く、部屋の温度計も32度を超えていました。この風は明け方近くまで吹き荒れていたようです。

アンダルシアではその程度で済んだんですが、次の日、スペイン北東部バルセロナ周辺では雹が降ったり、大雨で鉄砲水になったり、強風で木が倒れたり、と大荒れで、大変な被害が出たようです。ほんとに今年の気象は、冬からずっと記録的な異変続きです。読者のJさんからのお知らせによると、猛暑の夏はブドウの収穫にはいい材料だとのこと。そうなら嬉しいのですが、収穫や品質もさることながら問題は値段が下がるかどうか、にかかっています。一旦上がったものが下がることはナカナカありません。デモないか、今の日本はいつきに較べると色んな物が大分安くなってますものね。今週に入ってから日中の日差しの強さに変わりはないものの、朝晩、特に明け方はめっきり涼しくなり、寝るときだけは窓を閉めれるようになりました。

これで外の騒音はずっと小さくなり少しは安眠できると思います。夏至の前後一ヶ月位、日の高い間は部屋の中には殆ど直射日光は入らなかったのが助かりましたが、2ヶ月経過した今は太陽の正中高度も大分低くなって、その分部屋の中まで差し込むようになりました。暑い盛りにこれではたまりませんが、どうやらこれからは空気も澄んでくる気配なのでヤレヤレです。

正中高度、あまりなじみのない言葉だと思いますが、太陽が真南（または真北）を通過するときの高度です。つい最近まで、船乗りは meridian pass メリ・パスと言って

毎日正午近くにこの高度を計ることが重要な仕事でした。

何ゆえ、ドンピシャ正午でないかということ話し出すと長くなるのでハシヨリますが、こういう仕事も最早前世紀の遺物になりました。イヤ、その知識は今でも遺物ではないと信じたいのですが、正直なところその技術は最早不要です。皆さんも車でお使いのGPS所謂カーナビが船乗りの世界を大きく変えました。昔(つい先頃まで)は何も目標物のない洋上で自分が何処にいるかを知る事が、航海術の最も重要な部分の一つだったのに、今ではGPSが自動的に且つ正確に自分の位置を教えてくれます。

もう一つの大きな変化はコンテナ輸送です。30年位前までの船舶輸送、例えば日本の重要な外貨稼ぎの旗頭であった各種電気製品等の輸送は、木箱や段ボール箱に入れたものを一個一個手作業で船倉に積み上げていたのです。今では保税工場又は保税倉庫からコンテナで直送、船積みは大きなクレーンで一吊り約2～3分で終わり。コンテナ一個分以前なら十数人で1時間はかかった仕事量です。船の構造も変わりました。大きな変化です。当然、昔型船乗りは失業です。老兵は消え去るのみ。

ところで、窓辺の鳩。「種」が判明しました。と思います。首の両側にある三日月型の黒い模様、と言ったのは見違えで、黒い帯がグルッと首の後ろを回っていました。

ナカナカ後姿を見せてくれなかったので首の両側にしかないと見ていたのです。

これなら多分「数珠掛鳩」と言う種だと思います。別名「白子鳩」。広辞苑によると

日本では埼玉県の一部に少数が生息するだけとか。天然記念物だそうです。

これで正体だけは分かりました。デモ相変わらず前のハカランダで何をしようとしているのか一向に分かりません。時々飛んできては座っています。そしてホ・ホー・ホ

と鳴きます。なになに？ ホ・ホー・ホ？ ト・ツー・トじゃないか。Rです。

モールス信号のト・ツー・トはRなんです。コイツ、R、Rと呼んでいるつもりか？

そういえばモールス信号も、最早前世紀の遺物となってしまいました。

食べある記

「サルモン・ア(ウ)マード」の巻 2003年8月22日 更新

(西和折衷・ネコマンマ風食の融合・その一)

salmón ahumado 英語で smoked salmon 何の事はない鮭燻です。既にお気づきでしょうが、英語と同じか又は殆ど同じ綴りのスペイン語は沢山あります。というよりスペイン語の母体であるラテン語を語源とする英単語が沢山あると言うべきでしょう。先週の sepia もこの salmon もそうです。後者はアクセント記号があるかないかだけの違いです。まあ、お勉強は短く、このくらいでオシマイ。あさましくも呑んだり食べたりの話ばかりなので、せめて前説位は格調高くという苦肉の策。

こう暑くては、外へ食べに出るのも億劫になって、それでなくてもRはあまり外食が好きではないので、このところずっとウチメシです。Nは少しウンザリ気味。買い物は朝九時のスーパーの開店を待つようにしてやっつけるか、そうでなければ夕方、日差しがやや弱くなる7時ごろを狙ってサッと済ませます。

最初の頃はスーパーに行くのも厚い辞書持参で、かなり熱心に食品表示などを調べて廻っていました。お陰で小さい子の無遠慮な凝視に遭ったり、大人にもチラチラ見られたりしましたが、何処吹く風、ゆっくり時間をかけて辞書を引き引き買い物をしてました。

最近は大体の商品について知識の蓄積もできたので、辞書を持って歩くことは殆どなくなりました。しかし、勿論全ての単語が分かっているわけではありませんから、コリヤナンだっけということがしょっちゅうあります。じゃあ後でウチで辞書で調べようとお互い単語一つずつとか二つずつとか覚えて、口の中でブツブツいいながら帰る途中、一瞬何かほかのことに気を取られると、もう、すっかり忘れて思い出せないことが殆どです。ナサケない。そうかといって、ポケットに入るような小さい辞書は、食品表示にかかわるようなことには殆ど役に立ちません。解説は少しでいいから小さくて語数だけは充分というような辞書はないものでしょうか？ 小型辞書で有名なイ

ギリスのコリンズ社の西英・英西のポケット電子辞書で、ちょっと良さそうなのがあるんですが、見出し語の数がはっきりしないので、チョトマテの状態です。今回ジブラルタルでよく見るつもりでしたが、山の上の散歩に時間を使いすぎて、結局商店街は素通りになってしまいました。

さて、魚の味がイマイチだということは殆ど耳タコぐらいに言ってきました。春先に驚喜した地中海生マグロもホンのいつときだけで姿を消し、その後は又半腐りのようなマグロ、それもキハダやビンチョウばかりで全く食指が動きません。オミヤゲにもらった虎の子の庄内米があるので、何とか旨い鮭でもと思っていましたがネタのいいのが見つからず、このままでは宝の持ち腐れになってしまいます。こうなったら、洋風ネタしかないな、それなら何とかなるだろうと目先を変えてネタ探しです。で、とりあえず、行き着いたのが鮭燻です。これなら北欧諸国のものが色々入っています。ただ、難点は輸入品は結構高いんです。アチコチ物色した挙句、いいのを見つけました。商品全体、品物はいいけど高目なのでいつもは敬遠気味、見るだけ、の大手デパート系列のスーパーで、割安の一品を見つけました。

スコットランドで燻製したものです。私達は以前アイルランドで途方もなく旨い鮭燻に当たったことがあるので、あの境界の鮭にはいい印象を持っています。ダブリンの鮭燻問屋みたいな店で見つけた切り落としが、何と今まで食べたものでは最高でした。形を整えるために切り落とす部分は、腹身の薄くなった部分、言わばオトロの部分なんだから不味いわけはありませんね。このスーパーで見つけたものは切り落としではありませんが、やはり腹身で、腹骨をすき取ったあとどうしても形が悪くなる部分なんです。綺麗に大きくスライスできない所です。だから割安品なんです。ニギリ用には切れません。

これを小さく5ミリ角ぐらいに切ってちらし寿司。

大葉はないから代わりにコリアンダーとレモン皮みじん切り。これがまたぴったりハマッテ大成功！ これで庄内米も日の目を見ます。

* 買い物百般 *

「BBQ」の巻 2003年8月22日 更新

私達のピソは安普請ではありますが、角部屋ということも幸いしてまずまず住みやすい部屋だと思っています。隣近所の生活音や外の騒音はこういう「リゾートの下町」

に住めば我慢しなければならないことですから、そんなに苦痛ではありません。

煩くて寝れなければ、静かになるまで、又は煩くても眠れるぐらい眠くなるまで本でも読んでいればいいんです。明日何時に起きて、何をしなきゃ、ということもない毎日ですから。

暑くなってきてから、南スペインの家の条件で何が一番重要かよく分かりました。それは通風です。こういう日差しの強い所では、家の中を風が吹きぬけるということが何にもまして大事です。外はかなり暑い日でも、家の中で風の通り道に居れば寒くなるくらい涼しいんです。だから角部屋をあてがわれたことはほんとにラッキーでした。

この辺の家の建て方はきわめて安直で、始めに何本かの柱と各階のフロア兼天井を鉄筋コンクリートで作ってしまいます。この時点では駐車ビルでも作るのかな？という感じです。例えば五階建てとすると、五枚の平らな板を柱で上下に繋ぎ合わせただけです。柱だけでは持ちそうもないので、無数の仮設の鉄棒でも支えています。

その後、外壁や間仕切壁を作っていくんですが、これもまた、我々地震国の人間から見ると極めて危なっかしい造作で、穴明きレンガを積んで、裏表をセメントで塞ぎ、ついでにセメントの表面をコテでならして、はい、イッチョ揚がり、です。

全くただの積み木細工のように思えます。でもこれで別に違法建築ではないんですよ、何処でも堂々と同じ工法で建てています。

どんなに外見が綺麗で頑丈そうな建物でも同じです。まあ、マグニチュード7程度の地震が来たら殆ど全部のビルが崩壊でしょう。私達のように一階(日本の二階)に住んでいけば、まず助かりませんネ。

もうひとつ、この辺の建物の特徴は床材に人造大理石やタイルを多用していることで

す。私達がここへ着いた時は11月で、まだそとは暑いぐらいでしたが、人造大理石の床なんて初めてだったせいもあり、ちょっと冷たい感じを受けていました。

しかし、これも夏の暑さの中で涼しさを保つ長年の生活の知恵だったんですね。今となってはこの冷たさが何よりもありがたいのです。この夏私達はクーラーはおろか扇風機さえもナシで過ごしています。日中の外気は40度、という暑さを考えると我ながら信じられない気がします。

まあ、そんな訳で、安普請のあばら家なりにまずまずの住み心地なんですけど、一つだけ、いかにもスペイン的と言うか、間の抜けたところが有ります。台所に換気口がないんです。換気扇を取り付けるようにはできているんですが、肝心の穴があいてないんです。これには参りました。窓さえ開ければニオイがこもることもなく吹きぬけてくれますが、暑くなってくると、熱気はこもります。そこでBBQです。



我が家のベランダは午後は日陰になって風も吹き抜けるし、一等席です。暑くなってからは昼食・夕食はもっぱらここで済ませています。夏になる前に近くのスーパーで29,99ユーロの特売品コンロを買いました。1500

ワット、三分の一は鉄板、三分の二はグリルになっていて使い勝手がいいのです。実はこれの前に網焼き専門のを買ったんですが、ソレは失敗、ベランダは常に風に吹かれているので網じゃ焼けないんです。そこで、写真の風除けを作りました。

日本ではガステーブルの周りに立てる油ハネ防止のアルミ・パネルを売っていますねこれ探したんですがどうしてもありません。炭火を使う本式のBBQセットには付属品で金属の立派なのがついているんですが、こんな安物に合う奴はありません。

仕方なく段ボールで自作。今日のメニューはスペアー・リブ香草焼に **Monte Ducay Gran Reserva 1994**。 ムイ・ブエノ。

エクスカーション

この項はアンダルシアの各地へ徒歩、電車、バスなどで行った DAY TRIP の紹介です。

「ジブラルタル再訪」ノ巻 2003年8月22日 更新

また、ジブラルタルです。どうしてもあのケーブルに乗りたくて今度は天気予報を慎重に見て出かけました。見込みは的中、殆ど無風の状態でしたが、その代わり暑いのは、熱気のために視界もすっきりせず、何もかもを望むのは無理ということを確認しました。

それでも、一応アフリカも見えたし、眼下に広がるジブラルタルの町や港、湾の対岸やスペイン側の内陸の山なども見えて360度の景観を楽しめました。



(国境の北から見た朝もやにけむるザ・ロックの全容。画面左端辺りが国境)

両国の国境は今回はっきり見届けた所では双方のチェックポイントの間はわずか30メートル程でした。この前行った時は何事もなく通ってしまったので、パスポートなんかマジメに見てないんじゃないかと、ちょっとナメテいましたが、今回はマドリー

から来たスペイン人三人連れの一人に不備があったらしく、スペイン出国前にバスから降ろされて居ました。やはりイミグレはちゃんと仕事をしてたんですね。脱帽。ツアー・ガイドはこの件に関してはきわめて冷淡、知らん顔で、自分の事は自分で、が徹底した西欧社会を垣間見た気がしました。



(ジブラルタルの街。何処となくスペインの街とは雰囲気違います)



(ケーブルの山上駅から見たジブラルタルの街と港。右端にクルーズ客船)



(左、北のピーク、後方はスペイン。右、南のピーク、後方は海峡を越えてアフリカ)

ザ・ロックの東側は切り立った絶壁、西側は比較的なだらかですがそれでも平均4～50度の傾斜でしょう。上の2枚は山上駅からそれぞれ北と南を見たところです。



(右手は北のピーク、左はケーブル山上駅。茶色の部分は雨水を集めるための斜面)



(もやにかすむアフリカ大陸)



(ザ・ロックの主、お山の大将)



(ロンドン名物ここまで出張)



(標識の行く先が都市名でない事に注目)

ところで、ジブラルタル海峡は地中海・黒海を通じて唯一の自然開口ですが、この海峡での海水の流れはどちら向きだと思いますか？ (1)地中海に流れ込む。(2)地中海から流れ出る。(3)干満により行ったり来たり。 さて正解はどれでしょう。

黒海・地中海には多くの大河が流れ込んでいますね。ナイル河然り、ドナウ河然り、フランスにはローヌ河、イタリアにはポー河あり。

一方、例えば東京湾湾口・浦賀水道はどうか？伊勢湾湾口・伊良湖水道は？ これらは皆干満の影響で出たり入ったり、河の流れ込み分だけは出る方が多いのでしょうか。地中海での正解は一番ありそうにない(1)なんです。さて、何故でしょう？ 蒸発です、地中海性気候といわれる晴天続きによる海面の蒸発により、河からの流れ込みでは追いつかないほどの蒸発量があるらしいんです。若い頃読んだ英国版水路誌にそう書いてありました。意外でした、それゆえ深く記憶に残っています。勿論、干満の影響はあるし、夏の東風の強弱・冬の西風の強弱により表層流は影響を受けるんですが、トータルとしては(1)なんだそうです。しかし、近年の世界的異常気象ではこういう自然現象にもかなりの影響が出ているんでしょうね。オソロシイことです。

* ビーノ y セルベサ * 暫定版

「タポン・デ・コルチョ」の巻 2003年8月22日 更新

いつもの通りスペイン語のオベンキョーから。

tapón de corcho コルク栓、そうです、もちろんワイン・ボトルの栓のことですね。

原材料はコルク樫 **alcornoque** アルコルノーケの皮。材料名からして既にノンベの友達という感じじゃないですか。こっちの単語には、アタマが空っぽの人、なんてことも書いてありますが、空っぽだと軽いからでしょうか。アタマが軽いという感じ方はスペインでも同じなんですね。私も出来る事ならスカスカの軽石、風が吹き抜けるよ

うにさせていたいと思います。肩こりも少しは楽になるだろうし・・・。

この木はスペインの南西部、ジブラルタル海峡を過ぎたあたりからポルトガル南部一帯にかけてが特に多いようで、以前相棒だった機関長Kさんから、コルク積み取りのため **Huelva** ウエルバに入港したことがある、と聞いたことがあります。やはりその

辺が生産の中心地なんでしょう。

カディスへバスで行った時もヘレスに行った時も、沿道にこの木の林を沢山見ましたが、殆どは自然林ではなかったようです。カディス県やウエルバ県などで多く栽培されているのでしょう。そして時たますれ違うトラックの荷台にコルクの木の皮の束が満載されているのを何回か見ました。コルクの木の幹に上下約2メートルぐらいの間隔で切れ目を入れ、どこか一箇所縦方向にも切れ目を入れてグルッと皮をはがしてしまふんですね。こうして幹を裸にされてしまった木もバスの窓から沢山見えました。

最近、日本でも床材などにコルク・タイルを使ったりしてますね。日曜大工の店など

に材料を売っているのを見たことがあります。

リタイヤ後は自分たちが住み込めるようなボートを自作しようと夢見ていた頃、キャビン内の床にはコルクを張ろうと思っていました。裸足でも冷たくないし、柔らかい当たりが何ともいえません。絨毯など要らない筈です。薄いコーティングをかければ意外に汚れもつきにくく、耐水性もいいのです。新造の工作も、出来上がった後の補修

も簡単です。唯一の欠点としては構造材としての強度はないことです。だから木造ボートの材料としては向きません。

私達の計画はスチールのボートでしたから、強度は全面的に鋼鉄部分で負担して床材は単に内装材と考えれば良かったのです。もう宝くじを買うこともなくなったので、頭の中に詰まっているボート作りのアイデアの数々はそのまますぐおけへ持ってゆくことになってしまいます。armchair traveler と言いますが、この場合アームチェアー・ボートビルダーです。頭の中ではもう10隻ぐらいのボートは出来上がった筈で、これはこれで、負け惜しみでなく、充分楽しみました。

ところで、スチール・ボート・ビルディングに関する資料もかなりの量揃っていて、このまま持ち腐れではいかにももったいないので、どなたかやってみようかなという方いらっしゃれば差し上げます。メールを下されば詳細をお知らせ致します。但し全て英文です。

さて、今日は究極のアホの記録の一端をお見せします。



まず左の一枚これが私達が「ウチ」で呑んだコルク、何個有ると思いますか？ 中にはナカナカ凝った模様の焼印が入ったものもあります。右の写真、左から発泡酒カヴァ、弱発泡のアグハ、ちょっと高いリオハの栓、安い合成コルク。いずれも上下はこのままで瓶にはまっています。くびれ具合に注目、発泡酒のは下が太いですね。

高いヴィノの栓は何故か長いのが多い。高い分長いかな？
